

編集後記

イラクの戦況が日に日に激しさを増し、戦争の犠牲者の数が刻々と知らされる中でこの原稿を書いている。医療に携わるものとしてはなんとか生命の犠牲を最小限にしてこれが掲載される頃には戦争が終わっていて欲しいと願っている。また今後の日本経済はどんな状況になってゆくのだろうか、世の中全体に先行きが不透明な感がある。医療界でも特定機能病院における包括医療が開始され、医療特区構想などの方向が打ち出されてきており、医療を受給する側も供給する側も意識変革が求められてきている。医療資源にも限りがあり、無駄を省き、これを有効に利用することが必要である事は言を待たないが、価値あるものは価値あるものとしてきちんと評価されなければならないと思う。長時間の手術に耐え、深夜まで標本整理を行い、自己犠牲的な姿勢で日夜患者の管理を行うといったような患者を思う心は医療人にとっては連綿として培われた普遍のものである。これらの臨床経験や症例報告が玉稿として本号にも多く、掲載されている。症例報告でも臨床経験でも一つでも教訓的なことがあったならば是非論文にする姿勢を持って欲しいと思う。そして投稿していただいた先生方の玉稿はどんどん採用したいと考えている。しかし、提出された写真には、判読が困難なものもみられる。客観的所見を読者にわかりやすいように呈示することが最も大切なことである。これらの点に配慮が行き届いていない表現力の乏しいものが散見される。写真や図表の呈示に一層の配慮をお願いしたい。そのためには常日頃から症例を大切に、画像写真を真剣に読影し、切除標本の取り扱いに習熟していなければならない。すなわち診断力、観察力、探究心の高低が反映しており、しいてはその医療機関のレベルを反映していると言っても過言ではないと思う。

(宮川 秀一)